

ミツガシワ

笹川 通博

新潟は、水の都、と聞く。しかし、今は、その面影はほとんどないと思う。少しばかりの柳の並木は、水べから遠く離れ、通りの激しい道にあり、間が抜けている。堀が埋められる前までは、それでも、水の都であったのだろう。その堀の水たるや、ひどく汚いものだったと聞く。堀の維持管理には、大変な労力がある。しかも、時代は水運から自動車輸送中心になった。堀は、埋められて当然であったようだ。今日、水の都の名残は、信濃川と鳥屋野潟ぐらいであろう。新潟市内を流れる信濃川は、巨大な運河のようで、初めて見た時、これが日本一の大河かと、非常にがっかりした。鳥屋野潟たるや、こんな汚い湖のまわりに、よく40万もの人が住んでいるものだと、感心してしまう。新潟は、顔のない街だと、僕はつくづく思う。

水草研究会、という、水草を研究する者の全国的な組織がある。昨年、の全国的な組織がある。昨年の全国集会は、松江で行なわれ、僕も参加した。松江といえば、宍道湖のほとりの城下町、ラフカディオ・ハーンが愛した、それこそ、水の都である。ある先生と宍道湖の湖畔を歩きながら、水がたいへんきれいだと言ったら、いや、とんでもない、汽水湖だからきれいに見えるのであって、本当は汚いのだ、という返事であった。僕は自分の新潟のことを思い、大変恥ずかしくなった。今年の全国集会の開催地はここ、新潟である。全国の先生方に、この恥を披露せねばならない。

その準備のため、先日、数年ぶりに、鳥屋野潟の湖面を船で観察する機会に恵まれた。ところが、どうしたことであろうか、あれほど豊富であった水草が、ほとんどないのだ。昨年までは、それでもまだ水草はあった、今年は、ほとんど出ていない、という船頭さん



イモリ池のミツガシワ
(1980.5.29)

の話だ。水草がある年突然消えてしまった、という報告は、石川県の潟にもある。もっとも、来年はまたもとに戻るかもしれない。昨年、の水草研究会の野外見学では、多くの溜め池を見せていただいた。水草のたくさん生えている池もあれば、全くない池もある。当然、ほとんどの先生方は、水草のある池を熱心に御覧になる。しかし、ある先生がこうおっしゃったのが印象的であった。「どうして水草がないのかも、考えなくてはいけない」。

鳥屋野潟は水の汚濁が激しいとはいえず、まだ、比較的多くの水草が生育する。特筆すべきものには、オニバスやアサザなどがある。しかし、消滅したとみられるものも多い。そのなかに、ミツガシワという植物もある。1985年から3年間、県内51カ所の湖沼の自然環境が調査された。その報告書が新潟県環境保健部から昨年出た。その中に、それぞれの水草が何カ所の湖沼で生育するのかを数えた表がある。驚いたことは、ミツガシワの生育する湖沼が10カ所もあることだ。

ミツガシワはミツガシワ科、あるいはリンドウ科に入れられることもある。北方系の植物で、氷河時代の生き残りによく言われる。主に高地の湖沼や湿地に生育し、南の地方では大変珍しい。名前のように小さな葉が三つま

とまってつき、優しげな毛のある、白い可憐な花が咲く。同じ科のアサザやガガブタも美しい花が咲く水草であり、南方系で、県内では珍しいものだ。

この植物が、新潟県では約20%の湖沼に生育するのだ。しかも、山地だけではなく、平野にも生育する。県内の湖沼の環境が破壊されつつあるとはいえ、まだ、捨てたものでもない。しかし、少しずつ姿を消して来ていることも事実である。過去の記録をもると、鳥屋野潟や福島潟にも生育していた。この二つの湖沼の、今の哀れな姿を考えると、この上品な水草が生育していたとは思ってもいけない。現在の姿を考えてはいけない。

何十年も昔、まだ、湖が気の向くままに水をあふれさせていた頃を思わなくては。汽車が汽笛を鳴らして、水の上を走る。こんな所にこんな大きな沼が。地図には載っていない。旅人は不思議に思う。どこかの湖が、また、水をあふれさせたのだ。あふれた水は海まで続いたという。岸には、白い花が群がっていたことであろう。あるいは、この植物がよくやるように、浮島をつくっていたかもしれない。

コンクリートとアスファルトの浮島、新潟。自然と人との共存、ということがよく言われる。街の中に水と親しむことのできる場所を造ろうという動きが盛んらしい。かつて人々が遠ざけてきたものと、再び付き合おうというのだ。水草が生育する条件も、生育しない条件も、実はまだ詳しくは分かっていない。かけ声は素晴らしいけれども、その内容の実現のためには、まだまだ、研究しなくてはいけないことがたくさんある。それらが解決されるまで、果たして、水草は消えないで待っていてくれるであろうか。

(新潟向陽高等学校)